

「自己」のハイブリッドな構成について考える ——アクターネットワーク理論と統治性研究を手がかりに——

牧野 智和

自己のあり方、その行為者性のあり方に「モノ」はいかに関係するのか。本稿ではアクターネットワーク理論（ANT）と統治性研究を手がかりにして、自己とモノ、人間と非人間の関係性を考察する視点の錬磨を試みるものである。人間と非人間の関係は科学技術社会論を中心に検討が重ねられてきたが、その一つの到達点にブルーノ・ラトゥールらが提案した ANT がある。この立場は技術・社会・人間を切り分けることなく、異種混交的なネットワークとして記述・理解しようとする新しい魅力的な切り口を提示している。しかし、個別事例を越えたネットワーク化の戦略や、今日増殖しつつあるハイブリッドのデザインという事態までを ANT の立場は捉えることはできない。このような ANT の限界を超えるために、ジョン・ローのミシェル・フーコーへの言及、さらに統治性研究を発展的に折衷することで、デザインされる異種混交性の考察が可能になるのではないかと考えられた。

1 「私」とモノ

「私」とはどのような人間なのか、「私」はどんなことができるのか——。もし何か自己紹介めいたことをしなければならぬ場合、「私」はどのように説明されるだろう。几帳面なところがある、だらしないところがある、要領よくやりたいタイプだ等々、何でもよいが、こうした「私」の特徴について説明を行うとき、それはただ「私はこのような人間だ」と述べるのみで終わるものだろうか。おそらく少なくない場合において、それを例証するエピソードが追加されるだろう。

さて、そのようなとき、「私」の特徴はどのように例証されるだろう。几帳面な「私」の例証として、ポストイットや手帳に細かく備忘を残す、メールやメッセージは早めに返すといった話がなされるかもしれない。逆にだらしない「私」については、部屋や机、本棚が乱雑に散らかっているという例証が示されるかもしれ

ない。そして物事の進め方については、「タスク管理」のためにパソコンやスマートフォンをどう利用しているか、といった話がなされるかもしれない。「私」の意外性や多面性を示そうとするなら、車のハンドルを握ると性格が変わる、といった語り方もありえるだろう。

そうではない事例はもちろん多くあるが、今示したような事例は、「私」のあり方は部分的に「私」以外の何か、特に人間以外の「モノ」と関わっていることを表していないだろうか。ときには、手帳や机、スマートフォン、車等のモノなくしては、几帳面な「私」や、要領のよい「私」の例証が成り立たないどころか、そのような「私」のあり方自体が発生しない可能性すらある。

このような「私」とモノの関係性について、これまでの社会学が全く扱ってこなかったわけではない。だがこれまでの社会学におけるモノへの言及は、ファッションを主とする消費財の記号性を身に纏うという議論か（Finkelstein

1996=1998 など)、後述する技術決定論ないしはその反転たる社会決定論を伏在させたメディア論・情報社会論の周辺にほぼ留まり（水越2002 など）、多種多様なモノが日常的に「私」のあり方に分かちがたく食い込んでいるという事態をさして深く検討できてこなかったのではないだろうか⁽¹⁾。倫理学者のピーター・ポール・フェルベークは、モノは人間の経験を「媒介する装置」になると述べ、もしそれらがなければ「人間は経験を持つことすらできない」とさえ記している（Verbeek 2011=2015: 99）。だが、そのような媒介の様態は具体的にどのようなものなのだろうか。ジョン・アーリもまた、「社会関係を再構築しているのは非人間的なモノである」と述べ、「人間の能力の大部分が、これらの非人間的な構成要素との接続によって現実化されるものであるために、人間に特有の能力などといったものはほとんど存在しない」（Urry 2000=2006: 24-5）と主張しているが、ではどのようにその接続は考えうるのか。

本稿ではこのような観点から、「私」とモノの関係性を社会学はどう考えていくことができるのかについて検討したい。この関係性を問おうとした数少ない社会学的研究の一つに原田隆司と寺岡伸悟（2003）がある。本稿は原田らの仕事を引き継ごうとするものだが、原田らが時計、ガラスなどの事例検討に重心を置いたのに対し、本稿では「ものと人」の関係性を捉える視点を精緻化する、あるいは増殖させようとするものである。

2 アクターネットワーク理論における人間／非人間

2-1 技術の位置づけをめぐる三つの立場

「非人間的なモノ」が私たちにいかに影響を及ぼすのかということについては、「技術」を考察対象とする哲学、倫理学、そして領域横断的な科学技術社会論（STS）のなかで主に議論がなされてきた。なかでも STS では多くのレビューが積み重ねられてきたが、そのレビューの道筋はおおよそ三つの立場への落とし込みという流れをとっている。

第一の立場は、議論の出発点ないし仮想敵となる「技術決定論」である。これは「技術はもっぱら内的な力学の結果として発展し、他のどんな影響によっても動かされることなく、社会をそのパターンに合うよう形作る」というものである（Winner 1986=2000: 47-8）。この立場からすれば、新しい技術やメディアが登場するとその特徴や構造によって人間のあり方が決定づけられるということになるのだが、技術をめぐる議論においてこれは「ナイーブな」（同上）考え方として退けられ、以降の立場にとっての踏み台とされることになる。

第二の立場はそれに対する、「社会の方が技術のあり方を決定している」とする「社会決定論」である（村田 2009: 109）。ここではその最良の成果として、「技術の政治学」を標榜する哲学者ラングドン・ウィナーの議論をみておこう（Winner 1986=2000: 26-100）。ウィナーはまず、通俗的には「技術が多く形で人間の活動に構造を与えていること」が無視されているとみる。だが技術は実のところ、人びとの考え方や「仕事」等の意味する内容に介入し、「人間の活動と意味を再構成するように作用する強い力」を有するという。より端的に言えば、技術は「日常生活の網の目に織り込まれるや、わ

れわれが用いる装置、技術、システムはその道具性を脱して、まさにわれわれの人間性の一部になる」というわけである。

だがウィナーは技術決定論を主張するのではない。たとえば（ウィナーの議論が紹介される際に決まるとりあげられる）ニューヨーク市ロングアイランドの「異常なほど」に低い陸橋は、その先にある公園道路にバス——つまり公共輸送機関を使う「貧しい人々や黒人」——が入り込むことを物理的に防ぎ、陸橋をくぐることのできる自家用車を持つ裕福な白人のみに自由な交通を許すものである。これはまさに、先行する社会的状況が（この場合は陸橋を建設した建築家ロバート・モーグズに）特定の技術とそれがもたらす社会的効果を狙わせたのだとみることができる。こうしてウィナーは、特定の背景をもって生み出される技術の特徴とそれがもたらす心理・社会・政治的条件の生産、いわば「特定の技術が人間活動のために作り出す物質的・社会的インフラストラクチャー」への注目を喚起する。

だが社会決定論の立場は、ウィナー自身がその克服を企図してはいるものの、「社会的起源、すなわちある特定の技術変化の背後にいる権力者」に問題を還元してしまいかねない欠点をはらむとされる（Winner 1986=2000: 48）。それに対する第三の立場は、「社会—技術的 socio-technical」という言葉をしばしば用いながら、技術か社会かという二項対立の先に進もうとするものである。たとえば科学史を専門とするトマス・ヒューズは電力の歴史を、その自律性をもった「システム」の形成という観点から捉えようとし、そのような自律性を考えるにあたっては技術の内的力学だけではなく技術の形を決める外部因子（変化していく資源、そこに関わる組織・集団・個人など）も考慮する必要があるというスタンスをとった（Hughes

1983=1996: 15,647）。

また、ともに科学論を専門とするトレーヴァー・ピンチとウィーベ・バイカーは「解釈の柔軟性」（Pinch and Bijker 1987: 20-1）という観点を提示し、特定の技術が完成したとみなされるようになるまでは多様な解釈・用途が許容されている状況が、一旦完成したとみなされるとその解釈・用途が導き出された過程やそこでの疑問点等は「ブラックボックス」に閉じ込められ、不問のものとなってしまうことを論じた。具体的にピンチらは自転車を例にとり、ペダルが固定された「ボーンシェイカー」、極端に前輪が大きくサドル位置の高い「オーディナリー」、そして現在の自転車に至るようなサドルの位置が低く、ペダルと後輪がチェーンで結ばれた「ビシクレット」へと開発が進んでいった過程においては、複数の「社会的グループ」による解釈・利用目的の対立が存在し、その力関係によって技術発展の道筋が左右されていったとして分析を行っている。

ごく簡潔に整理すれば、ウィナーも部分的にはそうだが、この第三の立場は技術それ自体の特徴・自律性を考慮しつつも、それらが社会的に構成されていく経路についても考えようとしている。しかしながら、「技術の構築主義」（原 2012）とも整理されるこの立場においては、技術決定論と社会決定論の綱引きという以上に進んで、人間とモノの関係を捉える新たな視点が提示されたとは言い難いように思われる。これらの立場をさらに展開していったところで、人間とモノの関係性のあり方はより根本的に問い直されることになる。

2-2 アクターネットワーク理論という提案

前項で紹介したそれぞれの立場には、ある共通する前提がある。「技術」に対置される「社会」の、無条件ともいえる前提である（中島

2002: 71)。社会決定論という視点の発見は研究上の進展ではあったものの、技術が生み出される社会的背景、あるいは技術に関与する社会的集団を置くことは人間とモノの関係性の理解をときに妨げるとして、「社会的転回後のさらなる転回」(Latour 1992)を目指そうとする立場がある。ブルーノ・ラトゥール、ミシェル・カロン、ジョン・ローを中心として提案されたアクターネットワーク理論 (ANT) である。

ANT は「複数の概念から構成される方法論」(足立 2001: 7) とでもいえる包括的な立場だが、その鍵概念の一つに「一般化された対称性 *generalized symmetry*」(Callon 1986: 200) がある⁽²⁾。これは「人間と人間以外のものとの連関が、一方が主体で他方が客体という位置を占めずに考察されるべきである」という、人間と人間以外を同格に、対称的に扱おうとするスタンスを示すものである (Latour 1987=1999: 2)。だが、なぜこのようなスタンスをとる必要があるのだろうか。

ANT の立場の論者はしばしばこう述べる。「我々が『社会』と呼ぶものは、物質的に異種混交 *heterogeneous* なのである」(Callon and Law 1997=1999: 241)。彼らからすると、ウィナーが考察した陸橋、ヒューズが考察した電力システム、さらには貨幣、情報メディアから日用品まで、私たちの身の回りはモノ——電力システムなどを考慮するなら、ANT 流の表現にしたがって「非人間」と称する方が包括的だろう——であふれている。そしてそれぞれの非人間は私たちの暮らすこの世界において一定の役割を果たす活動体、アクターとして存在している。それらはごく日常的に、私たちの生に分かちがたく食い込んでおり、そのことに一旦気づくと非人間を「社会」には含まれないとして切り離し、考慮の外に置くことは難しい。

ところで、そうした非人間の役割とはいかな

るものだろうか。非人間自体の構造によって自動的にその役割が決定されるとみるべきだろうか。ANT はこのような技術決定論を当然採用しない。たとえば冒頭で示した手帳は近年の手帳語りの隆盛のなかでその期待される役割が明らかに変化しており (牧野 2015)、上述の陸橋はウィナーが示したような特定の社会的効果が目論まれて設計されている。ローが事例として示す「コンクリートの壁」もまた、どのような用途のもとに設計され、どのようにメンテナンスされ、(たとえば警備のために用いられる壁であれば) どのように人間が関わって運用されるかによって、その役割と効力は変わっていく (Law 1994: 102)。その役割は人間が能動的、非人間が受動的というように固定されたものではなく、ときに非人間は人間にある行動を可能にし、新しい経験をもたらし、あるいは何かを禁じるといった能動的な役割を果たすことがある。

今述べた事例を踏まえて整理すると、非人間は物質的な存在感をもって私たちの前に現れるだけでなく、さまざまな社会的利害関心を巻き込み、かつ言語等によってさまざまなかたちで表象されつつ、私たちの日常生活の網の目にそれぞれの役割を得て入り込んでいる。技術決定論、社会決定論、あるいは表象の分析 (ラトゥールはこれを言説決定論とする) のいずれかの立場をとることでは、そのような網の目は解きほぐすことができないと ANT の立場は考える (Latour 1991=2008: 17-20)。そこでラトゥールは、「人間性と技術を対極的なものと捉えることは、実質的には人間存在を洗い流してしまうことに他ならない」として焦点を絞ろうとせず、人間と非人間がともに物質的な存在性を有しつつ、社会的利害関心と表象の賭金にもなっているという「社会—技術的なものつれ」(Latour 1991=2008: 21) そのものに取り組む

べきだとする。

では、そのもつれはどのように分析・記述されるのだろうか。ANTの立場では、人間と非人間を切り分けずに（というより、切り分けられないと考えるので）、異種混交的な「人間と非・人間の畳み込み」のあり方に注目する（Latour 1999=2007: 248-9）。どのように人間と非人間という存在者、アクターがともに社会的利害に巻き込まれ、表象され、関係づけられていくのか。ANTは「アクターを追う」ということのみをほぼ唯一の方法論上の公準として（足立 2001: 7）、ある特定の「異種混交的な物質のパターン化されたネットワーク」（Law 1992: 381）が形成されていくプロセス、特にその解釈の柔軟性がブラックボックスへと閉じられて関係性が安定化していくプロセスを記述しようとする。この際、記述されたネットワークの外部に社会的背景が想定されることはなく（想定することは、技術と社会を再度切り分けた社会決定論に退行してしまうため）、異種混交的なネットワークの様態こそがANTが想定する、つねに生み出される続けるものとしての「社会」だとされる（Law 1992: 380）⁽³⁾。ただ、社会という言葉のこのような語用は混乱を招くと考えられたため、ANTの論者は異種混交的な部品が組み合わさったネットワークを「ハイブリッドな集合体 hybrid collectif」（Callon and Law 1995: 485）と表現することが多い⁽⁴⁾。ANTの立場においては、このハイブリッドな集合体において人間と非人間が織り込まれている網の目こそが、人間と非人間の関係性そのものだということになる。このようなスタンスをローは「関係的物質主義 relational materialism」（Law 1992: 389）、より近年では「物質的記号論 material semiotics」と表現している（2008）。

2-3 エージェンシーと布置連関

ANTは、「社会および自然的世界にあるあらゆるものを、それらが置かれている関係性の網の目が絶え間なく生成する効果とみなす」（Law 2008）という立場をとる。この立場は当然人間にも適用され、それはローやカロンによって「人もまた、異種混交的なネットワークによって生み出された効果」である（Law 1992: 383-4）、人間・非人間双方を含む「アクターの新しいアイデンティティは、関係のネットワークの物質的な異種混合性のうえに位置づけることができ、そのネットワークから区別することができない」（Callon and Law 1997=1999: 247）といったかたちで言明されている。

ANTあるいはそれを受けた議論においては、非人間との畳み込みを考慮したうえでの人間のあり方は、エージェンシー（行為者性）という言葉で表現されることが多い（Suchman 1998=1999: 190-1; Urry 2000=2006: 140; 床呂・河合 2011: 16; Verbeek 2011=2015: 59 など）。これは人間一般のエージェンシーを論じるというよりは、人間・非人間が畳み込まれた特定のネットワークにおいて人間が得ることのできる能力・特性という含意で用いられるものである。

このエージェンシーについてローやカロンは、当初「異なった物質のパターン化されたネットワーク」（Law 1992: 381）のなかで創発されるものだと表現していたが、やがてミシェル・フーコーに合わせて「布置連関 configuration」という用語によって表現するようになる。「エージェントは、異なった物質の布置連関において生み出される効果である」（Callon and Law 1995: 502）、「人が何を望み、考え、感じるか」ということは、社会・技術的環境の配置・編成のあり方（原語は configuration。引用者注）に依存する」（Callon 2004=2006: 41）、というよ

うに。本稿冒頭で示した、どのような人間なのか、どんなことができるのかといった問いをここで改めて引き取ってみると、ANTの立場ではそれはまさにハイブリッドな布置連関における位置づけ、いってみれば「主体のための可能な位置」(Foucault 1969=2012: 205)の問題だということになる。

ところで、より詳細に考えるとき、人間と非人間の間でより具体的に何が起きているのだろうか。上述したフェルベークは「人工物が『それ自体として』道徳的行為者性を『持つ』ことはありえない」が、人間がおかれるそれぞれの具体的状況のもとで、人間が何らかの目的をもつことに介入し、そこで生じる特定の道徳的帰結に不可分に関わるものだと述べる(Verbeek 2011=2015: 59,82,92-3)。これをフェルベークは「道徳的媒介」と呼ぶが、それは人工物の内在的な性質からもたらされるものでも、逆に人間だけの意図にすべて還元されるものでもないとする。人間と人工物が特定の場に出会い、人工物はその特定の場においてある行為や目的を媒介し、人間に可能性を開くというかたちでエージェンシーが生まれるとしてフェルベークはANTの議論を解釈している。

人類学者の床呂郁哉と河合香吏(2011: 9-10)もこれに近いANTの解釈を行っている。床呂らは、やはり人類学者のアルフレッド・ジェル(Gell 1998)の議論を参照しながら、モノは「反応や行為を引き起こすような、いわば行為の媒介物」としてみることができると述べる。ここまでの議論の繰り返しになるが、モノを「ただ単に社会関係を反映し、文化的意味が書き込まれる記号やテキストないし表象」とみなすのではなく(ただ、言語的实践を無視するというわけではない)、ものの物質性が人間に喚起する反応・行為に注目する点がANTからもたらされる認識利得の重要部分だとしている。

さて、このようにして人間と非人間のこれまでにない捉え方を提案するANTだが、下述するようなその学際的導入・応用に比して社会学、特に日本国内の社会学においてはその知見の含意がさほど検討されずにきた。これは素朴には、事象の社会的背景を考察すること——ラトゥールはピエール・ブルデューなどの名前をあげ、「社会学」をそのようなスタンスとして括ることがある——を認めず、特定のネットワークの記述に注力するANTのスタンスによるものと考えられるが、事象の社会的背景を考察するスタンスのみが社会学ではないだろう。だが、かといってANTを社会学に導入することの積極的意義はあるのだろうか⁽⁵⁾。次節ではANTをめぐる批判的見解を手がかりに、その意義について、また特に「私」や「人間」のあり方に関するその展開可能性について考えてみたい。

3 ハイブリッドな布置連関のデザイン／統治

3-1 アクターネットワーク理論への批判

ANTは人類学、認知科学、地理学、会計学、デザイン論をはじめとする多様な領域においてその含意が検討され、具体的な分析あるいは実践の成果を生み出してきた。だがその一方で、各領域においてそれぞれ批判的な検討もなされてきた。ここではその主だった批判三点についてとりあげたい。

まず、多くの論者が言及する点が、先に述べた「一般化された対称性」の貫徹に関する問題である。たとえば認知科学を専門とするルーシー・サッチマン(Suchman 1998=1999: 195-6)は、エージェンシーが人間と非人間からなるネットワークの内に均等に分布しているとは考えられないと疑義を呈する。特に「物

質—記号的ネットワークの布置を作り出す」ということ、あるいは行為者たる資格を非人間に「承認」し与えるということは、どうしても人間のみにはしか行えないのではないかと述べる。人工物のエージェンシーを人間と同様に記述しようとしても、そこには結局エンジニア、デザイナー、ユーザーといった人間の行為者がその「舞台裏」に立っていることを想定せざるを得ないのではないかと、人間／非人間アクター間の払拭しがたい非対称性について指摘している。

ティム・ダント (Dant 2005=2010: 112-4) もまた、速度が出ない、ぶれたりするといったかたちで自動車そのものが「行為する」と受け取れる事態は発生しうるものの、それは人間・非人間の間で自由意思、志向性、選択作用といったものが同様に配分されているということにはならないと指摘する。むしろ自動車に人間の選択作用を促す何かがあるとき、そこには往々にしてデザインや製作プロセスのなかで組み込まれた「人間の志向性が浸透している」のではないかと述べている。

このような非対称性の問題について、ディック・ペルス (Pels 1995: 277) は対称性テーゼの完遂は極端な目標であり、人間と非人間の区分を認めた「弱い」対称性テーゼを目指すべきではないかという代替案を示している。だがこれに対して経営学者の木佐森健司 (2009: 70) は、それは技術決定論と社会決定論という従来の二分法への退行ではないかという見解を示している。

第二の主な批判は、ANT がとる「前もって決められている構造はないという前提」(Callon and Law 1997=1999: 253) への批判である。技術決定論と社会決定論の双方を退け、ハイブリッドな集合体の外部に社会を想定しないという ANT の立場は、既存の社会科学において

用いられてきた階級、資本、社会構造、国家といった多くの観点の利用を禁じ手とすることになる (足立 2001: 10)。だがそのことは集合体が生じるにあたっての先行条件、いわば「より広範な社会・文化的なプロセス」(木佐森 2009: 69)、「文化歴史的な観点」(青山 2012: 171) を欠落させることになる。すると、ANT を用いた分析は「プロジェクトのいかなる帰結もそれは所詮偶発的であるという結論しか」引き出さないのではないかという疑義が呈されることになる (綾部 2006: 15)。しかし単純にこの欠落点を埋めようとするならば、それはやはり社会決定論へ退行してしまいかねない。

ANT から提出される知見のある種の「薄さ」は、第三の批判にも関わるものである。ANT を活用した分析は、多くの場合異種混交的なネットワークの描写 (リゾーム状のマッピング) に辿り着く。述べたとおり、その描写を掘り下げるべく社会的背景の検討がなされることはなく、注力されるのはそのようなネットワークが形成されるプロセスである。プロセスこそが重要なのだといえればそれまでなのだが、「フラットな存在論」(Ahrens and Chapman 2007: 104) と表現される ANT のこのような成果に対しては批判もある。たとえば科学技術史を専門とする中島秀人 (2002: 74) は、ANT の知見は「のっぺりとした一様なネットワークの広がりというイメージを抱かせ、ネットワーク相互の質的な差異を見失わせる危険がある」と指摘する。あるいは上述のダント (Dant 2005=2010: 110-1) は「あるのは大量の概念や図式、ほのめかしに満ちた要約的コメントばかり」と手厳しい。モノと人間はどのように相互作用するのか、「人間とモノの生きられた性質」について ANT はほとんど教えてくれないのだとダントは批判する。

こうした批判のすべてに対してというわけで

はないが、ラトゥールらは批判への応答を行ってきた。ただその応答は、批判を受けて ANT のスタンスを修正するような内容というよりは、ANT の狙いを再度述べ直すものか (Callon and Latour 1992; Callon and Law 1995)、ANT は防衛されるべき単一の「アプローチ」としての実体があるのではなく、多様性に開かれた考え方であり、それをを用いてどのような問いが生まれていくのかということこそが問われるべきだと訴えるものが主であったように見える (Law 2008)。応答が提出されているにもかかわらず ANT への批判がなされ続けてきたことは、応答が批判者を納得させる内容のものではなかったことを示しているのかもしれない。だが ANT の主導者たちは論争の軍配にはさして関心を抱かず、ANT の基本的スタンスを示した 1994 年頃までの活動を「アクターネットワーク理論 1990」(Law 2008) として区切りつつ、存在論をはじめとしたより多様なテーマへと研究を展開していくことになる (Latour 2013 など)。

3-2 デザインされるハイブリッド

ANT への従来の批判は、ANT の前提や方法論における不備あるいは限界を指摘しようとするものだったといえる。そのような批判に対して前提や方法論に関する代替案はほぼ示されなかったが、その一方で ANT は多様性に開かれた考え方であり、それをを用いて生み出される問いこそが重要なのだという見解、つまり ANT をめぐる応用への許容性が示されてきた。以下ではこれまでの批判とはまた異なる観点から、本稿の筆者が ANT 研究に関して抱いた疑問を手がかりに、ANT 応用の一可能性について考えてみたい。そのような応用可能性を示そうとするのは、そのような応用によってよりよく捉えられる社会的事象があると考えることが第一

の理由だが、合わせて、前項で紹介した批判にある部分対応できるような ANT の活用可能性が示せると筆者が考えるためだ。

ANT に関連した研究をみていくと、ANT を活用して「よい」「効果的な」集合体を形成しようとする論考・報告を一定数みることができ。ANT に示唆を受けた実践例としては、学習環境のデザイン、コミュニティデザイン、ランドスケープデザイン、ユニバーサルデザイン、参加型情報システムの構築、イノベーションを促進する環境の構築などがあり、こうした各対象においてそれぞれよりよい「ハイブリッドのデザイン」(上野・土橋 2006) が試みられている。これはおそらくデザイン論そのものの潮流変化に関係することで (小池 2011; 小林 2012 など)、ANT を参照せずとも同種のデザインは今日多く行われており、私たちはいまさまざまな形で人間—非人間の集合体にはめ込まれながら日々を生活していることができるだろう。だがそのなかで、私たちはどのような人間—非人間のもつれのなかに生活しているのだろうか。本稿冒頭の問題設定に引きつけていえば、無数の「ハイブリッドのデザイン」の最中を生きる私たちにとって、「私」とは一体何なのだろうか。このような問いは ANT を経由することで見えてきたといえるが、ネットワークをめぐる価値判断や評価を留保し、特定の事例に留まろうとする ANT では (足立 2001: 13)、「ハイブリッドのデザイン」の拡散とそれが私たちにもたらす帰結を十分には捉えきれないように思われる。

本稿の筆者がここで述べているのは、ANT への従来の批判が行ってきた前提や方法論に対する疑義ではなく、ANT が特に日本国内において生み出した、あるいは促進した状況、今日的現象についての指摘であり、これまでの批判において盲点となっていた部分である。またこ

のような、ハイブリッドな集合体が分析上の視座のみならず実践を支える根拠にもなっているという事態は、ウィナーやダントが述べたような、モノが人間によって意図をもってデザインされるということに関わり（第一の批判点）、布置連関が偶発性や個別性を超えたものである可能性の検討に関わり（第二の批判点）、提起されたデザインが人間とモノとの相互作用の精細な解釈あるいは創出に関わるという点で（第三の批判点）、ANT をめぐる諸批判にも集約的に関連した事態だと考えられ、その意味でも検討に値するといえるように思われる。

そこで本稿では以下、この点に関心を寄せてもう少し掘り下げてみよう。ANT の応用は、応用者個々人の解釈の問題というよりは、ANT を提唱してきた論者自身によって手がかりが示されてきたといえる。たとえばカロン (Callon 1987: 77) は ANT の草創期といえる早い段階で、技術者は新しいテクノロジーを考案する際、そのデザイン・展開・拡散においてつねに仮説を立てつつ行動し、その考察範囲は社会学の分析領域に及ぶことになるということを「技術者—社会学者 engineer-sociologists」という概念で示していた。また、エージェンシーという用語を導入してその考えをさらに展開し、新しいテクノロジー・商品・サービスの案出は「ヒューマン・エージェンシーの新しいフォームを形づくること」であり、「情報・コミュニケーション技術をデザインするとき重要なのは、ヒューマン・エージェンシーのタイプ、私たちが発達させたい人間のタイプをしっかりと吟味する」必要があるとも述べている (Collon 2004=2006: 51-2)。

国内では、状況的学習論等で成果を残してきた上野直樹を中心に、ANT の自覚的応用が企図されてきた。上野らは 2002 年という比較的早い段階で「道具や情報をデザインすること

は、単に単体の道具をデザインすることにとどまらず、それを使用する活動や場面、活動の背後にあるネットワークをデザインすることに他ならない。(中略) デザインを変えるとは、道具の仕様や形を変えることにとどまらず、デザインの際の社会—道具的ネットワークを再構築することを伴っている」(田丸・上野 2002: 20) という言及を残している。こうした言及を受けて、モノのデザインは人間やその体験、社会関係のデザインだとする見解に立つ応用的事例検討が国内においても多く積み重ねられていくことになる(上野・土橋 2006; 小池 2011 など)。

さて、ANT を経由しているのであれば当然、人間のニーズや能力といったものも人間と非人間の布置連関から生じるということになる(上野・ソーヤー・茂呂 2014: 173)。こうして、そのような布置連関を自覚的にデザインしようとする議論・実践が ANT を明らかに組み込んで行われ、「よい」「効果的な」好ましいネットワークが形成される条件が考察され、行われた活動の成否を判定する基準としてハイブリッドな集合体の構築状況が持ち出されるようになっている。ANT をめぐる学術上の論争の一方で、実に多種多様な領域において ANT の議論がスムーズに取り入れられたことは、ANT の概念を持ち出さなくとも世の中では既に無数の「ハイブリッドのデザイン」が企図されてきたことを看取させる。そうした企図をより広く考えてみると、有名なところでは東浩紀と大澤真幸(2003)において「環境管理型権力」の一例として指摘された、客の回転率を上げるべく配置された椅子がまず挙げられる(本当にそうであるかはともかく)。あるいは、高い回遊性のもとで人々を長時間滞在させ、売り上げを最大化させるようなショッピングモールの設計、またそうしたモールにおける効率的案内を企図し

たサインデザインなども挙げられるだろう（南後 2013: 165-6）。ANT はそのような企図により明確な輪郭と理論的根拠を与えた側面があるように思われるが、ANT がときにそうして関わりながら、人間と非人間がともにデザインされるようになっていく状況とは一体何なのだろうか。そのなかで私たちは一体どのような「人間」になっていくのだろうか。

上野らはかつて、私たち人間は自由に振る舞っているようでありながら、そのエージェンシーがしばしば「デザイン可能な何かとみなされ、そして実際にデザインされて」いるという側面があり、こうした状況を批判していくことは「焦眉の課題」とであると述べていた（上野・土橋 2006: 18）。ANT が加速させているのはそのような状況だと考えられるが、ANT は人間とそのエージェンシーをデザインしようとする企図の理論的根拠になっている点で、行われている個々のデザインを翻って捉えるには最適な視点ではあるものの、特定の事例に留まろうとする点において人間と非人間が各所でデザインされるようになっていくという状況そのものを捉えることができない。上野が示したこの課題に取り組むには、ハイブリッド・デザインの言語化・顕在化に貢献した ANT を踏まえつつも、その先に進んでいく必要があると思われる。

その課題に取り組んだ数少ない成果といえるのが土橋臣吾（2015）である。土橋は ANT を参照しながら、人間と携帯電話の布置連関の操作、敷衍していえば情報環境の設計によって私たちのエージェンシーが多種多様にデザインされている今日の状況について考察している。より具体的には、利用者個人個人の置かれた文脈を情報環境が察知し、個人個人に最適化された情報をいつ・どこでも提供してくれるようになっていくユビキタス化と、特にスマートフォンのア

プリが日常の行動一つ一つを細かく捕捉・支援してくれるようになっていくというアプリケーション化という観点から今日の状況が把握されている。「コトのデザイン」やユーザー・エクスペリエンスのデザイン（UX デザイン）などが標榜されながら、近年のメディアは私たちをますます多くの契機において、ハイブリッドのデザインに巻き込みつつ開発されていることを土橋は指摘する。そして土橋はそのような布置連関から身を引きはがすことのできない今日においては、人間とメディアが協働的に巻き込まれている最中からさまざまな思考や実践を付加し、「私たちのエージェンシーの別のあり方を想像していく」ことが状況への批判たりうるのではないかと主張している（土橋 2015: 29-33）。

このような、人間と技術が絡み合う「内部からその布置連関そのものを組み替えていく」（土橋 2015: 32）という構えを実効的にするためには、どのような知的資源が必要だろうか。ANT のアプローチ、つまり特定のメディア開発事例において、人間・非人間の布置連関が形成され、そこでの望ましい人間のあり方あるいはそのエージェンシーが「ブラックボックス」のなかに閉じていくというプロセスを描いていくことにも意味はあると考えるが、より事例横断的にそうしたプロセスを追い、重ね描きしようとすることも同程度かそれ以上に「別のあり方を想像していく」ためには有意義なのではないだろうか。メディア開発に留まらずに事例をより広げていけば、特定のアプリケーションの開発、椅子の設計と配置、モールの設計、サインデザイン等において人間と非人間がどのような布置連関に置かれたのかということを超えて、そのような布置連関がいかに同時多発的に、多種多様に仕掛けられ、個別事例を超えて私たちがどのようにデザインされているのかを

考えることが、現在の別様のあり方を考えるにあたってはより俯瞰的な見通しを与えてくれるのではないかと考えるのである。だが述べてきたように、ANT をそのまま受け取る限りではそのような考察は行いえない。この欠落を埋める手がかりは何だろうか。

本項がやや冗長になってしまったので、その手がかりについて考える前にここまでの議論を整理しておこう。ANT は人間と非人間のハイブリッドな集合体という概念を提起し、それらの関係性をこれまでにない視点から捉え直すとするもので、その視点から得られる認識利得には期待できるものがある。しかしながら、一般化された対称性の貫徹にはやや疑問符がつくところがあり、集合体形成の先行条件を不問にする点はむしろ集合体の理解を妨げてしまう可能性もある。さらに、従来のマッピングのみでは人間・非人間の関係性の質的掘り下げを期待することができず、ときに ANT を用いてハイブリッドな集合体がデザインされようとしている今日の動向を評価する準備が ANT には不足しているように見える。

最後の点については、批判理論の立場を汲む技術哲学が一部この問題に取り組んできたといえるかもしれないが、より抑圧的ではない、道徳的に正当なテクノロジーの設計を求めるようなところにやはり留まっている (Feenberg 1991=1995: 23; Verbeek 2011=2015: 155,166)。また、物理的環境のデザインが人間のあり方のデザインと重ね合わされている事例を考えるにあたっては、法学者ローレンス・レッシングの「アーキテクチャ」をめぐる議論が有益とも考えられるが、レッシングを応用した論者においてこの概念は技術決定論的に用いられる向きがあり (鈴木 2009)、また人間と非人間の関係について考える視点としても ANT に比べてレンズの焦点が緩く、ハイブリッドのデザ

インについて精緻に考えていくにあたって最適な視点とは言い難いように思われる⁽⁶⁾。

3-3 アクターネットワーク理論とミシェル・フーコー

さて、ラトゥール、カロン、ローはそれぞれ同じ方向を向いているとはいえ、その力点の置き方にはそれぞれ違いがある。前項で示した欠落を埋めるにあたっては、ローの言及、特に彼が ANT とミシェル・フーコーの仕事との接続を積極的に行っている点にヒントがあるのではないかと考える。

これまでみてきたような ANT の立場について、他の立場との関係性を説明しようとする際、ローはしばしば ANT とフーコーの仕事との連続性について言及する。たとえば「アクターネットワーク理論は物質性をめぐる記号論として理解されてほしいと思う。これはミシェル・フーコーの仕事と重要な部分を分かち合うもの」だという言及のように (Law 1999: 3-4)。ではどう分かち合うものがあるのだろうか。ローの言及を整理してみよう。

ロー (Law 1992: 380-7) によれば、社会学の行うことは異種混交的な「ネットワークの特徴化」であるという。これは ANT のことを示していると考えられるが、その後「組織、不平等、権力といった効果を生成するパターンがいかにして生まれたのかを問うこと」でもあるとする言及が並置される。そして「権力とは諸原因の組み合わせではなく、ネットワークの効果であるとみなすこの立場は、フーコー (『監視と処罰』) に近い」ものだという言及が続けられている。つまり、異種混交的なネットワークを探究する ANT は、その効果としての権力の探究に関わってくると考えられており、これはフーコーの立論に近い (そしてそれは社会学的な営みである) というのである⁽⁷⁾。

だが、ANTの基本的スタンスは「アクターを追う」ところにあり、徹底して具体的なネットワークの記述に終始することが多い。このような具体的記述に志向するANTは、どのようにフーコーの壮大な仕事に結びつけうるのだろうか。ロー (Law 1994: 95-6) は次のように述べている。「非常に一般的といえるパターン化の戦略が、物質的に異種混交する社会のネットワークになっていく」、ANTは「秩序化の様式が社会のネットワークへと転化していくことをめぐるツールを提供してくれるものだ」。ラトールやカロンにはあまりみられないタイプの言及だが、少なくともローは異種混交的なネットワークの組み立てを記述すること、彼によればそれとほぼ同義である秩序化の実践を記述することが、より一般的で遍在する布置連関の描写につながっていくことを示唆しているように思われる。たとえばフーコー自身、一望監視装置という事例は「あらゆる特定の用途から切離しうる、しかもそうすべき、政治技術論上の一つの形象」(Foucault 1975=1977: 207) であると述べているが、そのような立論をローもとっているようにみえるのである。

また、ANTをこうして踏まえたうえでフーコーの議論を見直してみると、そもそもANTの着想はフーコーの「装置」論ときわめて近いものだともみることができる (Foucault 1977=2000: 410-3)。多義的な概念ではあるが、フーコーは装置について「言説や、制度や、建築上の整備や、法規に関する決定や、法や、行政的措置や、科学的言表や、哲学的・道徳的・博愛的命題」といった、まさに不均質で「異質 *hétérogène*」といえる、「これらの要素間に作ることでできるネットワーク」であるという言及を残している。そしてこの要素間のネットワークのあり方は「戦略的な性質を備えている」もの、つまり特定の方向へと人々を導いていくための権力関

係の操作に介入していくものだともフーコーは述べている。より明確に言えば、「装置は、つねに権力の働きのなかには書き込まれて」いるものだということのである。

さて、ここまでみてきたとき、ANT、特にローの立論は多くの点でフーコーの議論を念頭に置いていることがわかるだろう。というより、フーコーとローの立論および語用の相似性からは、異種混交的なネットワークの「社会」なき具体的な記述に徹するANTは、フーコーの装置論（あるいはそれに限らないフーコーの分析スタンス）をある種突き詰めた立場だとさえ思わせる。こうした相似性および意識的な語用の重ね合わせを考慮するとき、人間と非人間のハイブリッドな布置連関を記述することは、単にある特定のネットワークの個別偶発的な形成を記述するというだけではなく、特定の事例を超えて人間と非人間の布置連関がいかに戦略として仕掛けられ、デザインされようとしているのか、ひいては私たちが現在どのような「主体のための可能な位置」に置かれているのかを考えることにも開かれているとみてよいのではないだろうか。またそのように考えることで、3-1で示した論点、つまりモノが人間によって意図をもってデザインされるということ、布置連関が偶発性・個別性を越えた戦略やそれを産み出す先行条件と関連すること、「人間とモノの生きられた性質」により深く分け入ることもそれぞれ可能になるのではないだろうか。

おそらく、ANTの論者のなかでもラトールの見解に忠実に従おうとするならば、このような展開はとりえないかもしれない。複数のハイブリッドな集合体のデザインから、より一般的な布置連関のパターンを考察しようとする試みは、デザインする人間を前面化する点で「一般化された対称性」テーゼから後退し、個別事例における「アクターを追う」というANTの

基本スタンスに抵触してしまうためである。だが上述したような ANT とフーコーの知見の近接性、またローが述べるような、ANT とは「教義や信条ではなく知的な主題」であり、「物質的—記号的な道具、感受性」であるとする言及を踏まえるならば (Law 2008)、「布置連関の生成を操作する戦略」(Law 1992: 387) について、より広い視野で捉えようとする試みは許容されうる応用であるように思われる。というより、次項で紹介するように、既にそのような応用は行われ始めているとみることができる。

3-4 統治性研究における異種混交性

ANT がフーコーに由来している部分は布置連関の産物としての権力、秩序という点だけではなく、主体性のあり方、ANT の言葉でいえばエージェンシーについても同様である。フーコーに遡って確認をしておく、権力はネットワーク上に働くもので、「個人は権力の一つの効果」としてある (Foucault 1997=2007: 31-2)、個人とは権力の効果でしかなく、それは「諸制度を貫く戦術的配備」から考えられるべきである (Foucault 2003=2006: 20) といった言及など、多くの箇所での着想の元が示されている。

だがそうだと、広く戦術的に配備されるものとしてのエージェンシーの探究はいかにして行われうるのだろうか。フーコーの権力論および装置論を引き継ぎつつ、また ANT の議論も参照しながら、人びとが今日置かれている状況について考えようとしてきた一群の研究をここでは参照したい。それは、フーコーが 1970 年代末に示した「統治性」という概念を精錬させ、現代の分析に活かそうとする研究群である⁽⁸⁾。

順に整理を行ってこよう。フーコーは 1978 年の「統治性」という小論のなかで、統治性とい

う言葉について次のような説明を行っている。「統治性という語で私が意味するのは、諸々の制度、諸々の手続きと分析と考察、計算、そして戦術からなる全体のことです」(Foucault 1978=2000: 270)。これは 1982 年の他の小論では「他者の行動の可能な領野を構造化することである」(Foucault 1982=1996: 301) とも述べられている。他にも統治 (性) については散発的に言及が残されているが、これまでのフーコーの議論との接続が論じ尽くされないままにフーコーは没した。

ニコラス・ローズによる 1990 年の『魂を統治する』(Rose [1990]1999=2016)、グラハム・バーチェルらによる 1991 年の『フーコー効果』(Burchell et al. 1991) を皮切りに統治概念は精錬され、また経験的な研究のテーマとなってきた。ローズ、トーマス・レムケ、ミッチェル・ディーンといった論者を中心に幾度か定義がなされてきたが、そのポイントの一つはローズ (Rose 1999: 52) が述べるところの「ヒューマン・テクノロジー」、つまり特定の方向に向けて人々の振る舞いを導こうとする、またそのために人々を解釈しようとする技術の経験的研究を統治性研究は行うのだとする点にある。「思想は、それが技術的になる程度に応じて統治になる」(Rose 1999: 51) とローズらは考えているのだが、こうした観点を踏まえてローズらは統治を「装置」「道具」「技法」などと不可分のものとして言及する。

「(統治性研究とは：引用者注) 権力を行使し、特定の問題に介入するための特定の装置と道具の発明およびその集合体についての研究」(Rose 1999: 19)

「統治とは計算された、合理的なプログラムや知の形態のうえに成り立ち、振る舞い

を方向づけ調整する技法とともにある権力関係してのみ言及される」(Lemke 2011: 18)

バーチェル (Burchell 1996: 19-20) は、統治概念とは権力概念の代替物であるとし、『監獄の誕生』において強調されすぎたきらいのある「従属を通した諸個人の主体化」に留まらない、それを自らの働きかけへと利用する諸個人の営み(自己のテクノロジー)との「接点」「相互作用」を考えようとするものだと述べる。レムケ (Lemke 2011: 3-4,17) もまた、「振る舞いの導き conduct of conduct」という統治をめぐる最も簡潔な説明は、強制的な権力観から区別された合理性と熟慮の契機、そして導かれる者にとっての開かれた可能性を含意するもので、この統治概念によってフーコーの権力分析は書き換えられた、ないしはより明瞭にされたと述べる。

さて、このような他者の振る舞いを導こうとする技術としての統治について、ローズはそれがまさに「異種混交的」(Rose 1999: 21)、「物理的」(Rose 1999: 32)であると表現している。これは気まぐれな言葉遣いではなく、そのすぐ後にラトゥールの仕事を紹介しつつ、特定の対象を記述するには特定のモノや技術が必要であることを説明していることから、自覚的な語用だとみることができる (Rose 1999: 36)。またその後にはより端的に、「統治の技術は認知、計算、言葉、権威、判断、建築様式、人間の能力、非人間的な道具などとともにある実践的知識の集合体」なのだという説明も追加されている (Rose 1999: 51)。人間を理解し、表わし、計算し、検査し、評価し、調査し、教え込み、訓練し、治療し、時空間的な組織を行う諸々の技術による攻囲のなかに人間なるものはあるとするこのような考え方は、もちろんフーコー由

来ではあるが、述べてきたハイブリッドな集合体の概念にかなり近似しているものといえる。というより、レムケ (Lemke 2011: 29) が自らのスタンスを「社会関係の表象へと技術を縮減すること、あるいは技術決定論的に社会を捉えることの双方を回避して、技術の物質性を捉えようとするものである」と述べるように、ANTの立場と統治性研究との接続はかなり意図的なものである。ローズらの回顧的なレビューにおいても、ANTは構造主義の拒絶、「なぜ」から「いかに」へという不可知論の共有、物理的なものへの積極的役割の付与という「アンチ・ヒューマニスト」のスタンスという三点において統治性研究の方法と合流したと言及され、その近接性が表明されている (Rose et al. 2006: 93) ⁽⁹⁾。

分析のスタンスとしても、言説(分析)に注目しながらも、そのさらなる可能性を追い求めようとする点でANTと統治性研究はかなり近い立場をとっている。カロンとローは意味生成が書き表わされたことのみによるものではなく、非言説的な手段によってなされる場合もあるとして、表象がときに「ハイブリッドな物質的形態をとる」ことも視野に入れた研究を行う必要があると指摘していた (Callon and Law 1995: 501-2)。一方、統治性研究においても、言語のみが現実を創造するとは考えられなく、技術という人々への介入形態に注目する必要があるとする言及がある (Rose et al. 2006: 89; Miller and Rose 2008: 31-2)。いずれにせよ、統治性研究はANTによる問題提起のある部分を受け止めつつも、特定の事例に留まらない展開を実現させた研究群だとみることができるように思われる。

しかしながら、統治性研究はハイブリッドのデザインを包括的に研究する手がかりを与えてはくれるものの、その視点を受けて実際に

行われた分析が ANT の着想を活かしきれているのか、物質的な異種混交性を扱いきれているのかということ必ずしもそうではない。たとえばその代表的な成果といえるローズの『魂を統治する』にしても、人間の精神にかかわる技術として示されているのはプロパガンダ、心理測定法、カウンセリング、心理学・精神分析の理論といったものが主で、物質的な異種混交性が分析の中核を占めているとは言い難いように思われる。他の研究者においても、政策や制度を考察の素材とすることが多く、やはり技術の物質性が具体的な分析において特段重視されているとは言い難い。バイオテクノロジーを扱ったローズの『生そのものの政治学』(Rose 2007=2014) は薬物や技術的に可視化された遺伝子など、異種混交的といえる対象が考察されているが、これはテーマ設定がそうさせているのであって、統治性研究が総体として ANT の着想を分析レベルに落とし込み、異種混交性をよく分析できているとはやはりいえないうように思われる。

このように、統治性研究の具体的な展開をみる限りでは、ハイブリッドな集合体をより広く分析していくためのアイデアは示されているものの、その分析において異種混交性がうまく明らかにされたとはいえず、これ単体ではやはりロールモデルたりえないように思われる。そのため、3-2 で示したようなハイブリッド・デザインの拡散状況、前項で示した「布置連関の生成を操作する戦略」を考察しようとする場合、ANT、フーコーの知見、統治性研究の発展的折衷が必要ではないかと筆者は考える。つまり前項と本項で行ったような、フーコーの仕事と統治性研究によって異種混交的な布置連関についての事例横断的な考察、より遍在的なものとして想像される布置連関への道筋を引いたうえで、具体的な布置連関(群)の描写について

はそれに最もよく迫ることのできるレンズである ANT の視点を採用するというような折衷である。ANT の視点をとることで初めてみえてくることがらを尊重しうる整合性、特定事例を超えていく拡張性、その双方を充たす最適解はこのような組み合わせなのではないだろうか。

4 デザインされる人間／非人間の研究へ

ANT を活用した具体的な研究は、最終的には 3-1 で述べたような布置連関のマッピングに行きつくことが多いものの、一部述べたようにロー (Law 2008) は ANT とは「教義や信条ではなく知的な主題」、物質をめぐる「関係性について面白い物語を語り、また介入していく道具箱」、「世界の関係的で物質的な、乱雑といえる諸実践への感受性」といった表現を残しており、その活用に拘束を強いているわけではない⁽¹⁰⁾。

だとすれば、もちろん「何でもあり」というわけにはいかないが、ANT がこれまで行ってきたマッピング重視の研究に留まらず、より広い視野に議論を展開していく試みもありえるのではないだろうか。その一例が前節で示した統治性研究だが、それに限らず、たとえば上述したアーリやダントは、ANT の問題提起に大きく影響を受けながらも現代社会における観光や移動の考察に向かっている。あるいはドーン・ムーアは ANT と統治性研究の双方を自らの研究目的に応じて摂取し、刑事処遇における「薬物」というアクターに注目した分析を行っている (Moore 2007=2015)。また、統治性研究や ANT とはほぼ無関係ながらも、観察する主体、視覚性といったものを「言説、社会、技術、制度といったものの相関関係が織りなす、還元不能なほど異種混交的なシステムの効果」(Crary

1990=2005: 21) であるとして、それらを決定づける布置連関について描出しようとしたジョナサン・クレーリーの著作もまた、異種混交的な装置に関する研究事例の一つと位置づけることができるだろう。

さて、内容的には繰り返しになるが、そもそもモノの創出者が「技術者—社会学者」であるとする指摘を踏まえれば、ANT を取り入れていてもそうでなくとも、「ハイブリッドのデザイン」は日々行われている。デザインが「コトのデザイン」へと入り込んでいる今日、そのような営みはますます自覚的で盛んなものになっていると思われるが、そのようななかで私たちは日々さまざまなかたちでハイブリッドな布置連関に巻き込まれている。だが、その一つ一つの巻き込まれは偶発的で、個別事例に留まるものばかりだろうか。そのようなものもあるだろうが、特定の事例を超えて、今日私たちが結局そこに収まってしまうような、まさにそうデザインされているような布置連関もまたありうるのではないだろうか。このことを考えるにあたって、ANT はハイブリッドな布置連関という視点をもたらしてくれるものの、そのみでは特定の事例から飛び立つことはやや難しい。フーコーの知見、統治性研究を合わせ参照することで、もちろん誰か権力者の陰謀論に帰すのではなく、デザインされるハイブリッドが総体として私たちをどこへ導き、私たちはどのようなエージェンシーを備えた人間に今なろうとしているのかということを含括的に考えることができるのではないだろうか。

いずれにせよ、私たちがいかにして社会的に構成されているのか、特に今までしばしば盲点となってきた非人間との関係のもとで構成されているのかを考えるためのアイデアを ANT、フーコーの仕事、統治性研究はそれぞれ提供してくれているように思われる。未ださして踏み

込まれていないといえる「もの与人」の社会的探究を行う地図として、あるいは既に多くなされているメディアと人間の関係を考え直すようなレンズとして、これらの道具箱がもたらす認識利得を測ってみる意義は大いにあると考えられる。

注

- (1) 歴史学者のリチャード・セネットも、社会科学の諸分野においては、物質的なモノは「社会的規範、経済的関心、宗教的関心を映し出す鏡」として取り扱われてきたと述べる。そしてそのような見方では結局のところ、「モノそれ自体は無視」されることになるという (Sennett 2008=2016: 29)。
- (2) 「翻訳」をはじめ、ANT における重要概念は他にもあるが、それらを余すところなく紹介することが本稿の狙いではない。本稿の狙いに即して、関連のある概念のみ以下では言及していく。
- (3) ローと近い立場をとるアーリにおいても、「ほとんどすべての社会的な実体は、人間とこれらの非人間的な構成要素とを結びつけるネットワークを必然的に含んだものであるため、人間独自の社会といったものは存在しない。つまり社会とは、必然的にハイブリッドなものなのである」(Urry 2000=2006: 26) といった言及がある。
- (4) 以下、「異種混交的」「ハイブリッド」という用語、「ネットワーク」「集合体」という用語は同義のものとして用いる。用語は統一したいものの、議論の文脈によってより明瞭なイメージを示すことのできる言葉が変わってくると考えられるため、また各所で参照する論者によって用語が統一されていないため、各所の文脈に応じてそれぞれの用語を用いていく。なお、後述する「布置連関」はこうした「ネットワーク」「集合体」におけるアクターの位置の分散・関連の様態を指すものとする。
- (5) ラトゥールは自らのスタンスを「アソシエーションの社会学」(Latour 2005: 9 など) と表現することがあり、カロンも自らのスタンスを「翻訳の社会学」(Callon 1986) とし、後述するようにローも自らの営みを社会学と表現している。そのため「ANT を社会学に導入する」というここでの言及は適切ではないのだが、ここでは、ANT を標榜しない社会学者の著述において ANT の含意がほとんど検討されずに

きたという状況を踏まえてこう表現している。

- (6) レッシグは規制の4条件として法、規範、市場、アーキテクチャを挙げ、アーキテクチャは「物理的な負担」を通して人々の振る舞いを規制し、あるいは可能にすることに関わると述べる (Lessig 2006=2007: 172-7)。レッシグがこの議論を行っているのは主に「サイバー空間」に関してだが、シートベルトのような事例が上記の4条件の考察において言及されているように、それは「実空間」の事例にも援用可能だと考えられる (Lessig 2006=2007: 184)。だが、レッシグ自身はアーキテクチャが絶対的な制約ではないと述べるものの (Lessig 2006=2007: 477)、この概念はしばしば『技術による人間疎外』の変奏 (鈴木 2009: 112)、つまり技術決定論のような趣きで語られてきた側面がある。鈴木謙介が述べるように、椅子の堅さが客の回転率を自動的に上げるわけではなく、その椅子が持つ社会的意味、物理的な空間の布置、客の側のリアクションなど、多くの社会的変数との相関からアーキテクチャによる規制は考えられる必要がある (鈴木 2009: 112-3)。それはレッシグが述べた上述の4条件それぞれについて考えるということなのだが、モノが有する社会的意味とその変容、規制に限らないさまざまな経験や行為者性の付与などを精緻に考えていくためには、ANTや統治性研究がより適しているのではないかと筆者は考えるため、本稿ではそれらの立場に注目していくこととしたい (他の社会学的アプローチを採用しないのも、このような理由によっている)。
- (7) フェルベーク (Verbeek 2011=2015: 116-9) などの技術哲学者もまた、物質的人工物が人間のあり方に関わってくること、もう少しいえば「主体の規定において客体が果たす構成的役割の、最初の発見者」という評価をフーコーに与えている。その象徴は『監獄の誕生』で、同書では「権力構造は物質的に現前」すること、「物質的環境は我々の行為を組織化」していることを示し、私たちの周りには「技術という権力」の網の目が広がっていることを明らかにしたというのである。
- (8) 統治性研究の紹介自体は既に多くの先行研究においてなされており、統治性研究とANTを接続させようとするものも海外では一定の蓄積がある (Kendall and Wickham 2004=2009 など)。そのため、本稿での議論はまったく新規なものとはいえないが、本稿での提案はANTと統治性研究双方の可能性をより

拡張しうる経験的研究のアイデアを提供しようとする点、日本国内におけるハイブリッドのデザインの拡散という今日的事例に対応した接続を試みる点、そして日本国内においては両論の接続の試みが未だほぼ行われていない点において一定の意義を有すると考えている。

- (9) ウィリアム・ウォルターズの近年のレビューにおいても、「理念と制度、理論と行動を分ける二元論」に対して、ANTと統治性は「技術と思考の関連性を問う議論は新しい」ものだと併置されて評価されている (Walters 2012=2016: 63)。
- (10) また統治性研究にしても、明らかにフーコーの言及を引き継いで、「統治性は道具箱なのであって、他の道具と組み合わせて用いればよい」 (Rose et al. 2006: 100)、統治性概念は「理論的ツールの一つに過ぎない」 (Walters 2012: 2) といった言及がなされており、決まった研究のプログラムが示されているわけではない。

文献

- 足立明, 2001, 「開発の人類学——アクターネットワーク論の可能性」『社会人類学年報』27: 1-33.
- 青山征彦, 2012, 「エージェンシー概念の再検討——人工物によるエージェンシーのデザインをめぐって」『認知科学』19(2): 164-74.
- Ahrens, Thomas and Christopher S. Chapman, 2007, 'Theorizing Practice in Management Accounting Research,' Christopher S. Chapman et al. (eds.), *Handbook of Management Accounting Research*, Elsevier Publishing.
- 綾部広則, 2006, 「技術の社会的構築とは何か」『赤門マネジメント・レビュー』5(1): 1-18.
- 東浩紀・大澤真幸, 『自由を考える——9・11以降の現代思想』NHK 出版.
- Burchell, Graham, 1996, 'Liberal Government and Techniques of the Self,' Andrew Barry et al.(eds.),1996, *Foucault and Political Reason: Liberalism, Neo-Liberalism and Rationalities of Government*, The University of Chicago Press.
- Burchell, Graham, Colin Gordon and Peter Miller (eds.), 1991, *The Foucault Effect: Studies in Governmentality*, The University of Chicago Press.
- Callon, Michel, 1986, 'Some Elements of a Sociology of Translation: Domestication of the Scallops and the Fisherman of St.Brieuc Bay,' John Law (ed.), *Power, Action, and Belief: A New Sociology of Knowledge*, Routledge Kegan & Paul.
- , 1987, 'Society in the Making: The Study of Technology as Tool for Sociological Analysis,' Wiebe E. Bijker et al.(eds.), *The Social Construction of Technological Systems: New Directions in the Sociology and History of Technology*, The MIT Press.
- , 2004, 'The Role of Hybrid Communities and Socio-Technical Arrangements in the Participatory Design,' *Journal of the Center for Information Studies*, 5: 3-10. (=2006, 川床靖子訳「参加型デザインにおけるハイブリッドな共同体と社会・技術的アレンジメントの役割」上野直樹・土橋臣吾編『科学技術実践のフィールドワーク——ハイブリッドのデザイン』せりか書房.)
- Callon, Michel, and Bruno Latour, 1992, 'Don't Throw the Baby Out with the Bath School!: A Reply to Collins and Yearly,' Andrew Pickering (ed.), *Science as Practice and Culture*, University of Chicago Press.
- Callon, Michel and John Law, 1995, 'Agency and Hybrid Collectif,' *The South Atlantic Quarterly*, 94(2): 481-507.
- , 1997, 'After the Individual in Society: Lessons on Collectivity from Science, Technology and Society,' *Canadian Journal of Sociology*, 22: 165-82. (=1999, 林隆之訳「個と社会の区分を超えて」岡田猛ら編著『科学を考える——人工知能からカルチュラル・スタディーズまで14の視点』北大路書房.)
- Crary, Jonathan, 1990, *Techniques of the Observer: On Vision and Modernity in the 19th Century*, The MIT Press. (=2005, 遠藤知巳訳『観察者の系譜——視覚空間の変容とモダニティ』以文社.)

- Dant, Tim, 2005, 'The Driver-Car,' in Mike Featherstone et al. (eds.), 2005, *Automobilities*, Sage Publications. (=2010, 近森高明訳『自動車と移動の社会学——オートモビリティーズ』法政大学出版局.)
- Dean, Mitchell, 2010, *Governmentality: Power and Rule in Modern Society (2nd ed)*, Sage Publications Ltd.
- 土橋臣吾, 2015, 「移動するモノ, 設計される経験——ケータイの可動性と可変性をめぐって」『マス・コミュニケーション研究』87: 17-35.
- Feenberg, Andrew, 1991, *Critical Theory of Technology*, Oxford University Press. (=1995, 藤本正文訳『技術——クリティカル・セオリー』法政大学出版局.)
- Finkelstein, Joanne, 1996, *After a Fashion*, Melbourne University Press. (=1998, 成実弘至訳『ファッションの文化社会学』) せりか書房.
- Foucault, Michel, 1969, *L'archéologie du savoir*, Gallimard. (=2012, 慎改康之訳『知の考古学』河出書房新社.)
- , 1975, *Surveiller et punir : naissance de la prison*, Gallimard. (=1977, 田村淑訳『監獄の誕生——監視と処罰』新潮社.)
- , 1977, 'Le jeu de Michel Foucault,' *Ornicar? Bulletin périodique du champ freudien*, 10: 62-93. (=2000, 増田一夫訳「ミシェル・フーコーのゲーム」『ミシェル・フーコー思考集成 1976-1977 セクシュアリテ 真理』筑摩書房.)
- , 1978, 'La gouvernementalité,' *Aut-Aut*, 167-68: 12-29. (=2000, 石田英敬訳「統治性」『ミシェル・フーコー思考集成 1978 知 身体』筑摩書房.)
- , 1982, 'The Subject and Power,' Hubert Dreyfus and Paul Rabinow(eds.), *Michel Foucault: Beyond Structuralism and Hermeneutics*, Chicago : University of Chicago Press. (=1996, 山田徹郎訳「主体と権力」『ミシェル・フーコー——構造主義と解釈学を超えて』筑摩書房.)
- , 1997, "Il faut défendre la société" *Cours au Collège de France 1975-1976*, Seuil / Gallimard. (=2007, 石田英敬・小野正嗣訳『社会は防衛しなければならない コレージュ・ド・フランス講義 1975-1976 年度』筑摩書房.)
- , 2003, "Le pouvoir psychiatrique" *Cours au Collège de France 1973-1974*, Seuil / Gallimard. (=2006, 慎改康之訳『精神医学の権力 コレージュ・ド・フランス講義 1973-1974 年度』筑摩書房.)
- Gell, Alfred, 1998, *Art and Agency: An Anthropological Theory*, Clarendon Press.
- 原拓志, 2012, 「技術の構築主義」大澤真幸ほか編『現代社会学事典』弘文堂.
- 原田隆司・寺岡伸悟, 2003, 『ものと人の社会学』世界思想社.
- Hughes, Thomas, P., 1983, *Networks of Power: Electrification in Western Society*, The Johns Hopkins University Press. (=1996, 市場泰男訳『電力の歴史』平凡社.)
- Kendall, Gavin and Gary Wickham, 2004, *Using Foucault's Method*, Sage Publications. (=2009, 山家歩・長坂和彦訳『フーコーを使う』論創社.)
- 木佐森健司, 2009, 「経営学におけるアクター・ネットワーク理論の展開と可能性: 情報システム

- 学において再現された二分法への批判』『日本情報経営学会誌』29(2): 64-75.
- 小林敦, 2012, 「共進化するテクノロジー・デザインの可能性——パパネック, ノーマン, ラトゥール, カロンの社会デザイン学」『21世紀社会デザイン研究』11: 87-96.
- 小池星多, 2011, 「コミュニティのためのデザイン——コミュニティをサポートするデザイナーの役割」『デザイン学研究』17(4): 22-7.
- Latour, Bruno, 1987, *Science in Action: How to Follow Scientists and Engineers through Society*, Harvard University Press. (=1999, 川崎勝・高田紀代志訳『科学が作られているとき——人類学的考察』産業図書.)
- , 1991, *Nous n'avons jamais été modernes : essai d'anthropologie symétrique*, Editions La Découverte. (=2008, 河村久美子訳『虚構の「近代」——科学人類学は警告する』新評論.)
- , 1992, 'One More Turn After the Social Turn,' Ernan McMullin(ed.), *The Social Dimension of Science*, University of Notre Dame Press.
- , 1999, *Pandora's Hope: Essay on the Reality of Science Studies*, Harvard University Press. (=2007, 川崎勝・平川秀幸訳『科学論の实在——パンドラの希望』産業図書.)
- , 2005, *Reassembling the Social: An Introduction to Actor-Network-Theory*, Oxford University Press.
- , 2013, *An Inquiry into Modes of Existence: An Anthropology of the Moderns*, Harvard University Press.
- Law, John, 1992, 'Notes on the Theory of the Actor-Network: Ordering, Strategy and Heterogeneity,' *System Practice*, 5(4), 379-93.
- , 1994, *Organizing Modernity*, Oxford: Blackwell Publishers.
- , 1999, 'After ANT: Complexity, Naming and Topology,' John Law and John Hassard(eds.), *Actor Network Theory and After*, Oxford: Blackwell Publishing.
- , 2008, 'Actor Network Theory and Material Semiotics,' Bryan S. Turner (ed.), *The New Blackwell Companion to Social Theory(3rd edition)*, Wiley-Blackwell.(Online)
- Lemke, Thomas, 2011, *Foucault, Governmentality, and Critique*, Paradigm Publishers.
- Lessig, Lawrence, 2006, *CODE Version 2.0*, New York : Basic Books. (=2007, 山形浩生訳『CODE VERSION 2.0』翔泳社.
- 牧野智和, 2015, 『日常に侵入する自己啓発——生き方・手帳術・片づけ』勁草書房.
- Miller, Peter and Nikolas Rose, 2008, *Governing the Present: Administering Economic, Social and Personal Life*, Polity Press.
- 水越伸, 2002, 「技術決定論／文化決定論」北川高嗣ほか編『情報学事典』弘文堂.
- Moore, Dawn, 2007, *Criminal Artefacts: Governing Drug and Users*, Columbia Press. (=2015, 平井秀幸訳『刑事司法における薬物処遇の社会学——「犯罪者／アディクト」と薬物の統治』現代人文社.)
- 村田純一, 2009, 『技術の哲学』岩波書店.
- 中島秀人, 2002, 「テクノロジーの社会的構成」金森修・中島秀人編著『科学論の現在』勁草書房.

- 南後由和, 2013, 「建築空間／情報空間としてのショッピングモール」若林幹夫編『モール化する都市と社会——巨大商業施設論』NTT 出版.
- Pels, Dick, 1995, 'Have We Never Been Modern?: Towards a Demontage of Latour's Modern Constitution,' *History of the Human Science*, 8(3): 129-41.
- Pinch, Trevor, J. and Wiebe E. Bijker, 1987, 'The Social Construction of Facts and Artifacts: Or How the Sociology of Science and the Sociology of Technology Might Benefit Each Other,' Wiebe E. Bijker et al. (eds.), *The Social Construction of Technological Systems*, The MIT Press.
- Rose, Nikolas, [1990]1999, *Governing the Soul: The Shaping of the Private Self*, Free Association Books. (=2016, 堀内進之介・神代健彦監訳『魂を統治する——私的な自己の形成』以文社.)
- , 1999, *Powers of Freedom*, Cambridge University Press.
- , 2007, *The Politics of Life Itself*, Princeton University Press. (=2014, 檜垣立哉監訳『生そのものの政治学——二十一世紀の生物医学, 権力, 主体性』法政大学出版局.)
- Rose, Nikolas, Pat O'Malley and Mariana Valverde, 2006, 'Governmentality,' *Annual Review of Law and Social Science*, 2: 83-104.
- Suchman, Lucy, A., 1998, 'Human / Machine Reconsidered,' 『認知科学』5(1): 5-13. (=1999, 佐伯胖監訳「補論 人間／機械の再考」『プランと状況的行為——人間－機械コミュニケーションの可能性』産業図書.)
- Sennett, Richard, 2008, *The Craftsman*, Yale University Press. (=2016, 高橋勇夫訳『クラフツマン——作ることは考えることである』筑摩書房.)
- 鈴木謙介, 2009, 「設計される意欲——自発性を引き出すアーキテクチャ」『思想地図』3: 110-35.
- 田丸恵理子・上野直樹, 2002, 「社会—道具的ネットワークの構築としてのデザイン」『デザイン学研究』9(3): 14-21.
- 床呂郁哉・河合香吏編, 2011, 『ものの人類学』京都大学学術出版会.
- 上野直樹・土橋臣吾編, 2006, 『科学技術実践のフィールドワーク——ハイブリッドのデザイン』せりか書房.
- 上野直樹・ソーヤーりえこ・茂呂雄二, 2014, 「社会—技術的アレンジメントの再構築としての人工物のデザイン」『認知科学』21(1): 173-86.
- Urry, John, 2000, *Sociology Beyond Societies: Mobilities for the Twenty-First Century*, Routledge. (=2006, 吉原直樹監訳『社会を越える社会学——移動・環境・シチズンシップ』法政大学出版局.)
- Verbeek, Peter-Paul, 2011, *Moralizing Technology: Understanding and Designing the Morality of Things*, The University of Chicago Press. (=2015, 鈴木俊洋訳『技術の道徳化——事物の道徳性を理解し設計する』法政大学出版局.)
- Walters, William, 2012, *Governmentality: Critical Encounters*, Routledge. (=2016, 阿部潔・清水知子訳『統治性——フーコーをめぐる批判的な出会い』月曜社.)
- Winner, Langdon, 1986, *The Whale and the Reactor: A Search for Limits in an Age of High Technology*, The University of Chicago. (=2000, 吉岡齊・若松征男訳『鯨と原子炉——技術の限界を

求めて』紀伊國屋書店.)

(まきの ともかず 大妻女子大学 makinotomo@otsuma.ac.jp)

(査読者、土橋臣吾、平井秀幸)

On the hybrid construction of the self:

A study focused on actor network theory and governmentality studies

MAKINO, Tomokazu

How does “things” relate to self and agency? In this paper, we will examine the theoretical framework about the relationship between self and things (human and non-human), using the actor network theory and the governmentality studies. The relationship has been studied mainly from science and technology studies. In these studies, Bruno Latour, Michel Callon and John Law proposed actor network theory. They describe the relationship as heterogeneous network without isolating technology, society and human. It is a new and attractive way to understand the relationship between human and nonhuman, but difficult to think the multiple strategies of networking and diffusion of “hybrid design”. We can overstep the limits of ANT and think designed heterogeneity, through utilizing the refer to Michel Foucault by Law, and governmentality studies.